The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語』に見える須磨、明石巻の影
Author(s)	阿部, 真弓
Citation	詞林. 1994, 15, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『松浦宮物語』に見える須磨、明石巻の影

阿部　真弓

はじめに

『松浦宮物語』が、平安朝物語『宇津保物語』『浜松中納言物語』を摂取していることについては、つとに指摘されている。『宇津保物語』から得た古代的雰囲気と、『浜松中納言物語』から獲得した浪漫的情緒は、本作品の基底をなす重要な要素であり、この二作品が果たした役割の大きさはいうまでもない。

さて王朝物語の摂取という問題における今一つの注目すべき点として、『源氏物語』の影響をほとんど認めることができないという指摘がこれまでに提出されている。この事象に関する、市古貞次氏の「恐らく努めてこれを避けたのではないかと、私は想像する。むしろ源氏物語に対する反撥が、物語文学の源氏の殻よりの脱出が、こゝに意図せられていると考えてよいのではなかろうか。」（1）という見解は、今日に至るまで、概ね有効といってよいだろう。『源氏物語』との関係に言及した論考は、ほとんど見出すことができない状態である（2）。

しかし、『松浦宮物語』は『源氏物語』を拒否することができたのか、また本当にそのような意図をもって創作されたのかについては、未だ検討の余地が残されていよう。概観したところでは、確かにその影響力は大きくないようにも思われる。しかし実は『松浦宮物語』にとって『源氏物語』は深層にて機能する心臓部であったのではないかと考えられるのである。

本稿では、従来ほとんど取り上げられることのなかった『松浦宮物語』における『源氏物語』享受に関する論を試みたい。『源氏物語』摂取の様相を明らかにすべく、第一節においては〈予言〉を中心に、そして第二節にてはその他の類似点について検討を行なうこととする。

一

『松浦宮物語』巻一には陶紅英、華陽公主、文皇帝による三つの〈予言〉が設定されている。〈予言〉は主人公の前世の因縁を説く部分と未来を示す部分から構成され、物語の推進力となる重要な働きを担うが、その内容、また作品内部における機

能の両側面において、『源氏物語』を踏襲したものとみなすことができる。まず、内容の類似性について検討を行ないたい。

遣唐副使として渡唐した弁少将は、八月十三夜、鳴り響く琴の音に誘われ、陶紅英と出会う。彼の言葉に従った弁少将は華陽公主と巡り合い、琴の秘曲を伝授された後彼女と契りを結ぶ。ために華陽公主は、日本への転生を彼に告げた後、昇天することとなる。

渡唐と琴の伝授という筋立ては『宇津保物語』を、また琴の音に導かれて女と契りを結ぶプロット、そしてその女性が転生するという展開は『浜松中納言物語』の河陽県の后をめぐる場面から摂取したものであろう。しかし、これらの物語では陶紅英の登場を説明することは不可能である。強いてあげるならば、場面構成の点では、『浜松中納言物語』にて、中納言と唐后の逢瀬直前に描かれている老人を（3）、そして役割の点からは、同じく『浜松中納言物語』において、夢の中で中納言の未来を暗示する僧侶を指摘できようか。また、荻谷朴氏は、陶紅英のモデルとして『晋書』巻四九列伝一九に登場する嵇康を想定しておられる（4）。しかし、それぞれ原型としての要素を備えていることは認め得るものの、存在感の格差は一目瞭然である。陶紅英像はそれらを核とし、作者の独創によって肉付けされたと、短絡的にその形成過程を結論付けてよいものかどうか、甚だ疑問と言わざるを得ない。

というのも、陶紅英の重要性は、弁少将に長大なる〈予言〉を与える人物という一点に帰するからである。「月のいりなむとする時に」（5）語った陶翁の言葉を整理すると以下のようになる。

①弁少将の渡唐は、琴の伝授という、前世からの因縁による使命を果たすためのものであるということ。

②陶紅英自身の経歴。琴の技量が評価され、高官を任じたが、自ら退き、出家した。

③琴の名手華陽公主の紹介。伝授の際の注意を与えるとともに、華陽公主に邪心を抱くことを戒める。

④戦乱の勃発と来世での再会を予言。

この〈予言〉が物語の推進力となり、新たな進展を生み出していくが故に、陶紅英は物語を読み解く上で、きわめて重要な存在と認知される。しかし、先述の三人物の周辺には、かかる〈予言〉の骨格となる要素を発見することはできないのである。

『松浦宮物語』が摂取を行なった『浜松中納言物語』在唐巻自体は『源氏物語』須磨、明石両巻から多大な影響を受けている（6）。陶紅英の役割を念頭に置きつつ、『源氏物語』まで遡行してみると、明石巻にきわめて興味深い場面を見出すことができる。それは、月夜に楽を演奏する光源氏と明石入道との会話シーンである。中でも入道の長大な発言に注目される。

光源氏が明石入道の琴の技量に感心すると、明石入道は、

なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること四代になんなり侍ぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘

れ侍ぬるを、物の切にいぶせきおり〳〵は掻き鳴らし侍しを、あやしうまねぶものの侍こそ、自然にかの先大王の御手に通ひて侍れ。山臥のひが耳に松風を聞きわたし侍にやあらん。いかで、これも忍びて聞こしめさせてしがな（7）

と伝授談義を発端とし、娘の明石君をほのめかす。箏相承に事寄せ、娘に興味を示した光源氏に対して、明石入道はすかさず「聞こしめさむには、何の憚りか侍らん。御前に召しても。」と畳みかけ、「おさ〳〵とゞこほることなう、なつかしき手など筋ことになん。」と、なおも娘の才能を重ねて強調する。

かくして、皮相的には琴伝授の議論が行なわれつつも、光源氏を明石君に引き合わせるための網の目が、着々とはりめぐらされていく。そして「いたく深行まゝに、浜風涼しうて、月も入り方になるまゝに澄みまさり、静かなるほどに」、ついに明石入道は光源氏に「御物語残りなく聞こえて、この浦に住みはじめしほどの心づかひ、後の世を勤むるさまかきくづし聞こえて、このむすめのありさま、問はず語りに聞こゆ。」と、自らの経歴とともに明石君への期待を本格的に語り始める。入道はまず光源氏の運命に言及し、「わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし年ごろ老いほうしの祈り申侍神仏のあはれびおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにや」と、彼の須磨流離は住吉明神の神意であると告げる。そして「先の世の契りつたなくてこそ、かくくちおしき山がつとなり侍けめ、をや、大臣の位をたもちたまへりき。みづからかくゐなかの民となりにて侍り。」と、近衛中将という官職を辞し、都をも捨てた経歴と、娘に託す思いを切々と語り続ける。その期待は、望みかなわぬこととなれば、「浪のなかにもまじり失せね」と娘に言い含める程、強固な決意でもあることを訴える。光源氏は明石の浦との因縁を漠然と感じていたにしろ、この時初めて、明確に宿世を悟るに至ったのである。

この夜の会見が、光源氏と明石君を結びつけ、ひいては彼の栄華をもたらしたのだといって過言ではない。『源氏物語』に数々ある印象的な場面の中でも、物語展開における重要性の点で、とりわけ注目される一局面であろう。

さて陶紅英の問題で看過してはならないのは、明石入道の理路である。明石入道は、伝授談義を端緒に、自分の現在に至るまでの経歴（陶紅英の〈予言〉の②に対応）と光源氏の須磨流離を有機的に関連づけることによって、彼の運命を解き明していく（同じく①に対応）巧妙なる論法をもって、琴の名手明石君との奇しき宿命を強調し、縁を結ぶよう、光源氏を説得する（同じく③に対応）。陶紅英の〈予言〉の要点①から④のうち、三要素までが明石入道の告白と一致を見せており、その類同性は明白である。『源氏物語』と『松浦宮物語』では主題をやや異とするが、両者ともに、男主人公を彼の運命の鍵を握る女性に引き合わせるための、言わば〈託宣〉とみなすことができる。陶翁の〈予言〉の基本構造は、既に『源氏物語』に存在してい

るのである。

明石入道、陶紅英ともに楽器に堪能で、自発的に官職を辞した出家僧という共通性を持ち、またその風貌も、「年は六十ばかりになりたれど、いときよげにあらまほしう、行ひさらぼひて」（明石入道）、「とし八十ばかりにて、しろくさらぼひたれど、よしありけだかきおきな」（陶紅英）と、どこか通ずるところを有している。

ただし、明石入道の言葉と陶紅英の〈予言〉との間には、大きく異なる要素が一点存在する。陶翁の〈予言〉ではあくまでも琴の伝授が主であって、華陽公主に対して劣情を抱くことは固く禁じられていた。しかし、華陽公主による第二の〈予言〉によって、それは覆され、実は二人が契りを結ぶことも運命として定められている事を弁少将は告知される。

このことのねをつたへ、かくまでなれぬるも、契のなきにはあらず。心のほかに、うかりけるひとつゆへに、世のそしりをおふべき身となりにければ、かくたづねおはせしなり。されど、この世に命をうけたること、いくばくならぬうちに、このかたにみだれあらば、かならず身をほろぼすべき我身なれど、しゐて命にかへておぼすにしあらば、十月三日、つきのいりなむとせん時、禁中の五鳳楼のもとをたづねおはせ。かならずそこにいでむ

華陽公主は、仙人から「琴のこゑによりて、かならず身をほろぼすゆへともなるべし」との予言を受けていた女性であった。よって弁少将と関係を持つことは即ち死を意味するが、しかし二人はそうした宿縁なのだと、彼女は説く。明石入道は、明石君を貴人にめあわせるという望み破れれば、彼女の投身をも辞さない決意を表明した。ロジックは反転するものの、入道の告白の結構は、『松浦宮物語』内においても、完全に保持された形で機能しているのである。

『松浦宮物語』では、明石入道の発言は一度屈折し、二段階の形態へと変貌を遂げている。『源氏物語』では、身分差に対する明石君の躊躇のため、光源氏にとって苦しい時期が続くのに対して、『松浦宮物語』では、主人公の苦悩の理由設定として〈予言〉の屈曲という趣向をとり、物語内部における〈予言〉の絶対優位をより強調するという新しい試みを行なっている。明石入道の告白を、絶対的予言というレベルへ移行した作者の営為は、成功したものとして評価してよいだろう。作者の中で消化された『源氏物語』は、作品独特の雰囲気をまとって新生しており、そこに、卓越した換骨奪胎をなした作者の技量を認めることができる。

以上の如く、陶紅英の〈予言〉、それを介して女性と巡り合う展開、華陽公主の〈予言〉という一連の構想は、一見『松浦宮物語』独自要素のように思われるものの、やはり作者の全くの独創とは考えられず、その主軸は『源氏物語』から獲得しているとみなすべきであろう。

さて、琴の伝授の他、弁少将が唐にて果たさねばならぬもう

一つの使命は、戦乱平定という難行であった。このプロットも文帝の遺言によって、まず象徴的に示される。

あらぬ国の人として、あひみる日かずゝくなけれど、汝はかならず、ひとたびは国をたいらぐべきそうあり。我このやまひ、つゐにおこたらずは、世みだれなんとす。なむぢ、かならず太子にしたがひて、おそれのがるゝ心なかれ。いのちあやぶみなくして、かならずもとの国にかへるべし。思ゆへありて、このことをもらしつ。いま見きく事を、もとのくにゝして、あだにかたりもらすことなかれ。人の国にかへりさるとも、前の世の契ありて、つゐに我身にはなれぬゆへあるべし。かならずこのよしをわすれず、我こと葉をそむくべからず

前世の因縁により、太子をささえ、動乱を鎮静すべき彼の運命を説いているが、この言葉についても、『源氏物語』との密接な関係が指摘できる。文帝の〈予言〉は、賢木巻、朱雀帝に対する桐壺院の遺言を骨格にしていると考えられる。

侍つる世に変はらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見とおぼせ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、おさ〳〵はゞかりあるまじうなむ見給ふる。かならず世中保つべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに親王にもなさず、たゞ人にておほやけの御後見をせさせむと思給へしなり。その心遣へさせ給な

ここに見られる人物関係は『松浦宮物語』とは齟齬を来すが、その直後に描かれる「大将にも、おほやけに仕うまつり給べき御心づかひ、この宮の御後見し給べきことを、かへす〳〵の給はす。」という院と東宮と光源氏の会見の構図は、幼き太子を託す文帝と弁少将の図式と完全に対応する。文皇帝の遺言は内容や構図の点で桐壺院の遺言と酷似しており、右に示した『源氏物語』の一連の場面が礎となって、『松浦宮物語』の局面は構成されたとみなせよう（8）。

以上のように、『松浦宮物語』に見られる三つの〈予言〉は、『源氏物語』にその類型を見出すことができる。それらの原型は作者の巧みな手腕により、物語論理に適合した〈予言〉へと変貌を遂げるに至った。

なおここで注意したいのは、作者は〈予言〉の構築時、『源氏物語』の表層面だけでなく、その本質をも摂取しているということである。『源氏物語』、そして『松浦宮物語』において、「宿縁」の告知は男主人公を覚醒させる装置として仕掛けられており、それを受容した主人公は取り巻く環境に対し、運命、使命を全うすべく能動的に活動するという構図が設定されている。

先程少し触れたように、『浜松中納言物語』においても霊夢という形で予言が男主人公に与えられるが、「覚めて後、『いかにみえつるならん』と、思ひあはすべき方もなき心ちするに」（9）と、彼は明確なメッセージを読み取ることができず、そのため、運命に対する自覚のないままに、女と契ることとなる。

結局、男主人公が河陽県の后との宿世を悟るのは、離唐直前、二人の間に生まれた子供と対面した時である。その時点に至るまで、二人が子をなす程深き宿縁であると認識することはおろか、契りを結んだ女性が唐后であったことさえ知らなかった。『浜松中納言物語』では、主人公は事後告知により、自分の運命を感得する構図をとる。

これに対し、『源氏物語』では事前に運命的指針が示されており、光源氏はそれに従った行動をとる。先述の入道の告白の件はその一例である。また、それ以前、光源氏が明石入道からの迎えを受諾し須磨から明石へ移るという行動選択を行なったのも、夢による桐壺院のさとしという判断基準がすでに与えられていたためであった。『源氏物語』において、宿運認知は主人公の指針獲得を意味し、行動制御としての機能を発揮する。

『松浦宮物語』でも、『源氏物語』と同じく、弁少将は前世の因縁を事前に感得し、それに則って活動する。陶紅英、文皇帝の〈予言〉に関しても、またたとえ女の死をも前提とする華陽公主の〈予言〉であっても然りである。運命認知時、光源氏は明確な悟りの言葉を表明するのに対して、弁少将は悲哀感に沈滞するという性格の相違はある。それが非意志的人物と評される一つの所以ともなっていようが、しかし彼の行動は無目的なものではなく、見方を変えれば、現世での使命完遂に努めた、むしろ能動的といえるものである。『源氏物語』同様、『松浦宮物語』内においても、〈予言〉は弁少将の行動規程として効力を発するという構図、物語論理が組まれているのである。

こうした機能性についても、『松浦宮物語』の〈予言〉は『源氏物語』と類同性を持つと看取でき、真の意味で『源氏物語』摂取が行なわれていると認定され得る。〈予言〉に関する問題におけるポイントは、皮相的摂取のみならず、機能性の導入という本質的摂取を行なったところにある。〈予言〉が主人公を動かし、物語を推進していく。作者は、こうした物語原理を『源氏物語』から学びとり、物語内に結晶させたのである。

以上の検討の結果、『松浦宮物語』の〈予言〉には、『源氏物語』摂取を認めることができ、その重要性は無視できないと看取される。そうした視点に立つと、実はこの物語が『源氏物語』、とりわけ須磨、明石巻から摂取した要素は、決して少なくないことが見て取れる。次節では、対象を物語全体に広げ、『源氏物語』との関係を探ってみたい。

二

本節では、『松浦宮物語』全体に散見される『源氏物語』との類似点について検討する。『源氏物語』摂取は、文辞や場面設定のみならず、全体の構想に絡む部分にまで波及しており、殊に、琴伝授、戦乱、鄧皇后との恋愛という三大プロットの構想時、必要不可欠な営みであったと思われる。須磨、明石巻の輪郭を写し取るが如き受容を行なっていると窺われるため、物

語の流れに従って考察を進めることにする。

物語は、弁少将の生い立ちから始まり、神奈備皇女への恋慕、皇女の入内決定、遣唐使の宣旨、そして渡唐へと進行していく。主人公の素性や遣唐使として渡唐する点には『宇津保物語』、神奈備皇女との恋の顛末に関しては『狭衣物語』等の影響が濃厚なことは周知であり、私もそれに異を唱えるつもりはない。

しかし、この序章部分からすでに『源氏物語』摂取は始まっている。萩谷氏が指摘されるように（10）、主人公の書始や元服の年令に一致が見られるし、弁少将の英才ぶりは光源氏に通ずる。そして渡唐前の恋愛場面は、『浜松中納言物語』散逸首巻における中納言と大姫の恋愛プロットからの影響を完全に否定することはできないものの、その状況や神奈備皇女の造型からして、『源氏物語』を踏襲している可能性はきわめて高い。

神奈備皇女に想いを打ち明ける場は菊の宴の後に設置されているが、そこから想起されるのは花宴巻における右大臣家藤の宴後の場面、即ち、桜の宴後に逢瀬を持った女が東宮に入内することになっている朧月夜であることを光源氏が知るシーンである。弁少将が参上した皇后御所の「宮も御まへのかれ野御らんずとて、はしちかうおはします」、「うちとひとつにほへるくろぼうのたぐひなき」という様子や、「およびて、御手をとらへ」て歌を贈る弁少将の行いと、花宴巻にみられる「藤はこなたのつまにあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人〳〵出でゐたり」、「空薫ものいとけぶたうくゆりて」という寝殿の有様、そして「たゞときゞうち嘆くけはひする方に寄りかゝりて、き丁越しに手をとらへて」、朧月夜に歌を詠みかける光源氏の行動との間には、明確な類似性が認められる。

この場面の役割上、神奈備皇女は朧月夜に対応することになるが、人物造型の観点からも、彼女が朧月夜の系譜をひいていることは確認できる。遣唐副使に任命された弁少将がまさに都を発とうとする時、入内する身でありながら、彼に恋歌を贈る神奈備皇女の姿は、離京の準備を進めている光源氏からの歌に対して、危険も顧みず返歌する尚侍朧月夜とオーバーラップする。神奈備皇女の積極性は、朧月夜から獲得した性質ではなかろうか。また、『松浦宮物語』では『源氏物語』とは異なる手法によって回避されるものの、朧月夜同様、神奈備皇女が后犯しの危険性をはらんだ人物として造型されていることは、刮目に価しよう。

しかし、それら個々の類似もさることながら、神奈備皇女との恋愛から渡唐へと移行していく展開に我々は注意せねばならない。物語の進行上、神奈備皇女との恋愛は、渡唐と有機的関連を持たない。ところが朧月夜との関係が光源氏の離京、須磨流離の展開を招くことを念頭に置けば、この恋愛プロットは主人公の離日、渡唐の導入部であるという解釈が可能となる。他物語の要素に彩られているために、プロット間に内容的緊密性は認められないが、このプロットは物語に組込まれる必然性を有するものとして看取される。

「三月廿日の程に、大宰府に」到着した弁少将は、そこに一時逗留した後日本を離れ、順調な航海の末、無事に明州に上陸する。この周辺には『浜松中納言物語』の影響が顕著に見られるが、河野由美子氏が指摘されたように、須磨巻における光源氏が離京し須磨に赴く場面との関係も見過ごせない（11）。むしろその方が文辞的にも、また、「三月二十日あまりのほど」（須磨巻）の出発ということで日程的にも一致を見る。そしてまた、文皇帝が弁少将を厚遇するため、臣下が諫言を呈するという、その後の展開は桐壺巻を思い起させる。

続いて、陶紅英が登場し、華陽公主物語の幕開けとなる。弁少将が懐郷の情にかられる部分と須磨巻との関係については萩谷氏、河野氏がすでに指摘しておられるが（12）、その直後から陶紅英と出会うまでの場面、

たゞ人一、二人をぐして、ゆくえもなく、道にまかせていづれば、しりしらぬ秋の花、色をつくして、いづこをはてともなき野原の、かたつかたははるかなる海にて、よせかへる浪に月の光をひたせるを、はるかにながめやりて、みちにまかせて、むまをうちはやめ給へば、夜中ばかりにもなりぬらんとみゆる月かげに、松かぜとをくひゞきて、たかき山のうへに、かすかなるろうをつくりて、きんひく人ゐたり。心にいりたることにて、ろうのもとにのぼるいしきざはしのしもに、むまをとゞめて、おりてのぼれば、まだいとゝをし。上はしろきすなごにて、おろそかなるやたてり。ろうは南によりて、はるかなる海をみおろしたり。ことに人のけはひもせず、きんのこゑばかり、いふよしなくすみのぼりて、かぎりもなくおもしろきに、いかでこのて、ならはむの心ふかくて、あまり人はなれにけるけはひは、おそろしけれど、このきざはしをのぼれば、人やくるともおもへらず、とし八十ばかりにて、しろくさらぼひたれど、よしありけだかきおきなの、ないがしろのぼうしをしいれて、そばにすゞり、ふでばかりおきて、ちりもくもらぬ月かげに、琴をひくなりけり。

という箇所に関しては、明石入道の告白直前の場面がかなり意識されていると思われる。

のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれるも、住み馴れ給し故郷の池水思ひまがへられ給に、言はむ方なく恋しきこと、いづ方となく行ゑなき心ちし給て、たゞ目の前に見やらるゝは淡路島成けり、「あはと遙かに」などの給ひて、

夜の月
あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める

久しう手ふれ給はぬ琴を袋より取り出で給て、はかなくかき鳴らし給へる御さまを、見たてまつる人もやすからず哀にかなしう思ひあへり。かうれうといふ手を、あるかぎり弾きすまし給へるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何と

も聞き分くまじきこのもかのものしはふる人どもも、すゞろはしくて、浜風をひきありく。入道もえ耐へで、供養法たゆみて、急ぎまいれり。（13）　（明石巻）

情景描写のみならず、琴の音に誘われて明石入道が光源氏のもとに参上する場面展開も、人物関係は逆転こそすれ、『松浦宮物語』と酷似している。『松浦宮物語』でも右引用部分の直後に〈予言〉が行なわれることを勘案すれば、やはりこの箇所には明石巻を経由した表現、展開がとられていると判断される。

翌日の八月十四日、いよいよ弁少将は、〈予言〉に従って、「しやう山」へと華陽公主を訪ねていく。

くれもはてぬに、いそぎいでゝ、きゝしかたにたづねゆく。いみじきむまを、いとゞうちはやめつゝ、夜中にもなりぬらむとみゆるほどに、おなじごとたかき楼のうへに、琴のこゑきこゆ。はるかにたづねのぼれば、道いとゝをし。これはかゞみのごと光をならべ、いらかをつらねてつくれる物から、やかずすくなく、かりそめなるやに、人すむべしとみゆれど、わざと木かげにかくれつゝ、楼をたづねのぼれば、いひしにかはらず、えもいはずめでたき玉の女、たゞひとり琴をひきゐたり。

このシーンは、物語展開の点においても、また、日時などの素材や、女主人公の住居の様子を対照的に描写するレトリックに関しても、次掲の、光源氏が初めて明石君を訪れる場面ときわめてよく似通っている。明石君は、入道のいる浜の館ではなく岡辺の宿におり、仲介者の場所から離れた所に住まいしている点においても、『源氏物語』と『松浦宮物語』は近似性を持つ。

十三日（八月一五日）の月の花やかにさし出でたるに、たゞ「あたら夜の」と聞こえたり。君は、すきのさまや、とおぼせど、御なをしたてまつりひきつくろひて、夜ふかして出で給。御車は二なくつくりたれど、所せしとて、御馬にて出給。惟光などばかりをさぶらはせ給。やゝとをく入る所なりけり。（中略）造れるさま木深く、いたき所まさりて、見所ある住まゐなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心ぼそく住みたるさま、こゝにゐて思ひ残すことはあらじとおぼしやらるゝに、物哀なり。　（明石巻）

如上の他、琴という構成要素に着眼するならば、須磨流離譚においても、それが重要な役割を果たしていることは言うまでもなかろう。両物語において、琴は二人の仲を彩るための単なる小道具ではない。明石君との心くらべが続く光源氏は、

君は、この比（秋一五日）の波のをとに、「かの物の音を聞かばや。さらずは、かひなくこそ」など、常はの給。　（明石巻）

と独り寝をかこつ。『松浦宮物語』でも、

おなじ月日も、ところからはひさしき心地するに、ひとりねの秋の夜は、まして思のこすことなけれども、かの御かたみのねをだに、えかきならさず。ありしおしへをおもへば、いとゞのみつゝしむさへ、なぐさめがたければ、

わすれじとつたへしことのねにたてゝこひだにみばや
秋のながき夜

と、弁少将が琴をよすがに華陽公主を偲ぶこともできず、煩悶する場面があり、同種の様相が窺われる。男主人公にとって、琴は女君の象徴にまで高められた存在として認知されているのである。また別れの宴において、光源氏は明石君に琴の演奏を要求し、その琴は再会するまでの形見となるが、これは華陽公主が別れに際し、弁少将に形見として水晶を授けたことを連想させる。

以上、華陽公主物語も、文辞レベルや場面、物語展開などの点で『源氏物語』と酷似している。〈予言〉の問題も含め、あたかも須磨、明石巻の輪郭をたどるような構築がなされており、両巻は構想基盤として摂取されたものと理解できる。従来、恋愛プロットは『浜松中納言物語』を焦点にして論じられることが多かったが、むしろ『源氏物語』の影響を重要視すべきであろう。

続く戦乱部は一転して、王朝物語とは全く異質な趣の展開となるため、『源氏物語』との表層的類似については、今のところその証左を見出すことはできない。しかし、この物語における動乱部の位置付けを行なう上で、『源氏物語』はきわめて有効な手がかりとなる。一瞥したところ、天下動乱記事は他のプロットとは独立並列の関係にあるが、第一節で論じたように、戦乱プロットの萌芽が、賢木巻の遺言を基底とする〈予言〉という形で用意されていること、そして叙上の如く『松浦宮物語』において須磨、明石巻の影響が多大であると推察されること、以上の二点から、物語構想に導入された必然性が浮き彫りにされるのである。

賢木巻での桐壺院の崩御は右大臣家の勢力集中を招く主因となった。光源氏は須磨流謫によって、保身をはかったのであるが、それは、険悪な政情の最中に、右大臣家に対して彼が取り得た最善の防御かつ攻撃の策である。即ち、須磨流離とは、遺言によって桐壺院から託された幼い東宮と藤壺中宮を守るための政争そのものなのであった。文帝崩御後、幼帝と母后を援護し、戦う弁少将の姿は、この光源氏の姿と寸分違わず重なり合い、『松浦宮物語』の動乱の構造はまさしく須磨流離譚と一致していることが浮かび上がってくる。

天下動乱部は、光源氏須磨流謫というフィルターを通せば、決して唐突なものでも異質なものでもなく、物語の構想上、他のプロットと密接に絡み合う筋立とみなせる。かかる政治的プロットを物語内に設定するという意欲的な営みの原動力として、須磨、明石巻が果たした役割は大きかったのではないか。須磨流離譚は『松浦宮物語』の恋愛の側面のみならず、政権をめぐる戦乱という軸においても、構想基盤としてきわめて重要な位置を占めているのである。

天下動乱プロットの終結部においては明石巻の影響を如実に物語る場面も見出せる。鄧皇后は、乱平定後、望郷の念が弥増

す弁少将に理解を示し、便宜をはかろうとするが、「かぎりあるあとによりて、三年をすぐすべき」という事情と、「いやしきゝはにだに、位をさづけられぬる人は、かへるならひなし」（以上巻二）ということを根拠に、それを非難する臣下も少なくない。こうした状況は、明石巻で朱雀帝が光源氏の帰京を望むのに対し、「世のもどき、かろ〴〵しきやうなるべし。罪におぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず赦されむことは、世の人もいかゞ言ひ伝へ侍らん」と弘徽殿大后が強硬に諫めるところと符合する。

諫言が論拠としてあげる年限がともに三年であることは、注目される。この一致は、『松浦宮物語』が三年という期間に拘泥することに対して、一つの解答となり得ることを示唆している。また光源氏の帰京が権力闘争の終結、右大臣側の敗北の象徴となるのと同様、弁少将の帰朝も政権奪回という第二の使命の完遂を意味することから、その構造においても、本質的類同性が確認できる点も看過できない。

以上のように、戦乱部にも須磨流離譚の意義を把握した上での摂取の様相がみられる。華陽公主物語とまた異なった位相で、『源氏物語』は構想基盤としての役割を担っており、『松浦宮物語』深層部に及ぼした作用は多大であったと理解できる。

後続する鄧皇后との恋愛プロットに関しても、多岐にわたって、『源氏物語』の影響が看取される。

謎の女の幽艶なイメージや、主人公が女の素性を知らぬまま関係を続ける筋立は夕顔巻からの影響とされる河野氏の論は首肯できるものである（14）。夕顔巻との関連性は、梅、牡丹など、花によって存在が暗示される鄧皇后の造型という点からも、認められよう。

また弁少将離唐時に形見として鄧皇后より贈られた鏡に着目すると、光源氏離京直前の紫上との贈答歌に注意が喚起される。

身（光源氏）はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ

と聞こえ給へば、

別（紫上）れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし　（須磨巻）

『松浦宮物語』では帰京、『源氏物語』では離京と時間設定上、完全な逆転をみるが、鏡に姿を留めたいとする光源氏と紫上の望みは、『松浦宮物語』において、伝奇的脚色が加えられ、成就されることとなる。

このように鄧皇后物語も須磨流離譚に回帰する側面を有するのだが、ここまでのプロットと異なり、須磨、明石巻にはこれと対応するプロット自体は存在しない。しかし錦仁氏が説かれているように、弁少将と鄧皇后との恋愛が、中納言と唐后の恋、ひいては光源氏と藤壺中宮の関係を擬していることは明白であるため（15）、この恋愛譚が『松浦宮物語』に設けられたのも故なしとしない。なぜなら、離京前の光源氏の藤壺への発言に「かく思ひかけぬ罪にあたり侍も、思ふ給へあはすることのひ

とふしになむ、空もおそろしう侍。」（須磨巻）とあり、この時点では、須磨流謫は藤壺との密通の因果応報として位置付けられていたからである。かかる論理が存在することは、鄧皇后物語の発想因の一つに数えられよう。

ただし、明石入道の告白の瞬間、后犯しのテーマは明石君を中心とする構想に取って代わられる。須磨流離譚において、このテーマは運命的緊密性が示唆されながらも、一瞬にして浮遊、霧散してしまい、定着を見ない。つまり后犯しのテーマは、須磨流離譚の枠組み内では、実質的に成立しない。

『松浦宮物語』においても鄧皇后との恋愛のプロットは后犯しの危険をはらむものの、「〈帝の后を犯すテーマ〉は、あるようでいて実は存在しない」（16）のである。しかし、ここで私が主張したいのは、后犯しとしての条件の欠如によって、そうした結論が導きだされるわけではないということである。鄧皇后の種明かしによって、二人の恋愛は前世の因縁によるものではなく、「たゞ思わく所なき心かろさばかりに、とがをおほせられ」（巻三）るべきものと位置付けられるが故、その時点で、この恋愛譚はそれまでの予定調和的世界から遊離し、逸脱したプロットに変貌してしまうという、須磨流離譚と同質の構図が存在することこそが、重要なのである（17）。鄧皇后物語は、『松浦宮物語』内において実体を失い、まさに偽跋にいう「そらごとのなかのそらごと」の様相を呈することとなる。早急に断じることはできないが、こうした構造は『源氏物語』と一脈通じるように思われてならない。作者は、須磨流離譚の構図を十分認識した上で、鄧皇后物語を構築しているのではないかと憶測される。そしてかかる様相を見て取るに、『松浦宮物語』の女主人公は鄧皇后ではなく、華陽公主であると判断されるのである。

いよいよ物語は終結部へと向かう。鄧皇后の尽力によって、「この月廿日（六月筆者注）ごろに、みやこいづべき日もさだめられ」、「七月十五日ふなで」（以上巻三）し、弁少将は帰朝した。光源氏の場合は「七月廿よ日の程に、又かさねて、京へ帰り給べき宣旨」（明石巻）が下り、八月十五日以前に帰京しており、近似する。離京、帰京の時期がともに符合するのも、多分に意識的な操作によると考えられる。

華陽公主は転生し、二人は再会する。華陽公主との結びつきが強くなるに従い、神奈備皇女とは疎遠になる一方だが、そこには彼女が朧月夜的役割をもって描かれていることが反映されていよう。その後、華陽公主の懐妊により、琴伝授の家としての繁栄が暗示される。位相は異なるが、光源氏の現実的栄華を約束する明石君の懐妊と軌を一つにするものとみなせる。子の誕生ではなく、懐妊というやや中途半端な形のまま物語が幕を閉じるのも、明石巻では明石君の懐妊にとどまり、姫君の誕生を見ないのと関わりがあろう。

日本に転生し、幸福に包まれた華陽公主は、しかし、鏡をめぐって、新たな宿業を背負うこととなる。鏡の中の鄧皇后を慕

う男主人公の様子に、遙かなる唐土へ嫉妬の炎を燃やす華陽公主は、まさしく明石君を意識し、苦悩する紫上である。これまで、明石君的人物として描写されてきた華陽公主は、鏡の存在によって、役割の転換を強いられてしまう。紫上の役割を負わされた彼女の懊悩は、今後癒されることはありえない。よって『松浦宮物語』は彼女の永遠の苦悶を暗示しつつ、終焉を迎えねばならないのである。構想の挫折として扱われてきた結末も、須磨流離譚を介在させることにより、その必然性を、そして作者がそこに秘めた深遠な意味を解明することが可能となるのである。

以上、『松浦宮物語』と『源氏物語』との関係を、ごく大略的ではあるが、抽出、通覧してきた結果、その影響は作品全体に及ぶと確認できる。興味深いのは、摂取要素のほとんど全てが須磨、明石巻を中心とした光源氏須磨流離譚に関する巻に集束している現象である。文辞的な面から物語の根源に関わる部分に至るまで、そのエッセンスを余すところなく利用しており（18）、『松浦宮物語』の基本的構想は須磨流離譚に依拠していると言っても過言ではない。

看過してはならないのは、『松浦宮物語』は単に須磨、明石巻の枠組みを持つのみならず、光源氏須磨流謫の本質を軸として据えた作品だということである。中でも〈予言〉に見られる様相は、重要な問題をはらんでいよう。菊地氏は『浜松中納言物語』在唐巻と須磨、明石巻の本質的関連について、「辞句や表現といったことではなく、全体にわたる構造―都とは隔絶した世界で展開した物語がある段階で主人公に宿世を自覚させる―の類同性が問題である」と指摘しておられるが（19）、『松浦宮物語』と須磨、明石巻との類似はそうした運命認識の局面にとどまらず、機能性までにも及ぶ。それは『松浦宮物語』を『源氏物語』の影響下にある〈貴種流離譚〉として読むことのできる可能性をも示唆していよう。錦氏は、『松浦宮物語』が「主人公の出世・栄達の強化と増幅に向かって進行している」と読み解いておられるが（20）、貴種流離譚の定義を「若い神や男女主人公が何かの事情で所属する社会を離れ、異郷に流離し、多くの艱難を経験した後に、尊い地位に到達する」（21）とするならば、『松浦宮物語』は、貴種流離譚としての成立要素を完全に満たしていることともなるのである（22）。

むすびとして

従来否定的な見方が強かった『松浦宮物語』の『源氏物語』摂取に関する論を試みた。やはり『源氏物語』は、『松浦宮物語』の通奏低音として脈動していたのである。これまで構想の一貫性の欠如ばかりが強調されてきた作品であるが、『源氏物語』を介すれば、各プロットは緊密に絡み合う。

その枠組から逸脱しているのは、ただ一つ、両親の情愛である。換言すれば、これこそが『松浦宮物語』の独自要素かつ特色なのであり、作者はそれを認識しつつ、執筆していたと窺われる。その意識のあらわれが、あるいは『松浦宮物語』という題号ではなかったかと憶測されるのである。

以上、さまざまな問題点を保留したまま、問題提起に終始した粗略なものとなってしまったが、『松浦宮物語』の新しい読みのための試論として終えることとする。

注

(1) 『日本文学教養講座7　中世小説』（至文堂、昭和二六）

(2) 『源氏物語』の影響にふれた論考は管見では、河野由美子氏「松浦宮物語考―妖艶美について―」（『国語国文学研究』13　昭和五三・二）、菊地仁氏「物語作家としての藤原定家―松浦宮物語の位置づけ―」（『国学院雑誌』82―2　昭和五六・二）、錦仁氏「定家と物語―『松浦宮物語』試論―」（『論集　藤原定家』　笠間書院　昭和六三）などにとどまる。

(3) 佐野正人氏「『松浦宮物語』論―新古今時代の唐土―」（『日本文芸論叢』8　平成二・三）に指摘がある。

(4) 角川文庫『松浦宮物語』（萩谷朴訳注　角川書店　昭和四五）二七ページ注一二及び補注八一。また中国の人物にモデルを求めるなら、廉承武も忘れてはならないだろう。遣唐使として渡唐した藤原貞敏は、廉承武からは琵琶を、琴については妻となった廉承武女から伝授を受け、帰朝した。伝授の際の人物関係の点でも『松浦宮物語』と共通項を持ち、注目される。

(5) 以下、『松浦宮物語』の引用は、『鎌倉時代物語集成』第五巻（笠間書院　平成四）による。

(6) 菊地仁氏「浜松中納言物語の在唐巻―源氏物語からの照射―」（『国学院雑誌』79―3　昭和五三・三）

(7) 以下、『源氏物語』の引用は、『新日本古典文学大系19　源氏物語　一』（岩波書店　平成五）、及び『新日本古典文学大系20　源氏物語　二』（岩波書店　平成六）による。

(8) この〈予言〉が桐壺院の遺言を背景とすることは、『松浦宮物語』の構想上、戦乱のプロットがいかなる位置にあるかを解く重大な鍵となり得る可能性をはらんでいるが、その問題については、第二節にて論ずることとする。

(9) 『浜松中納言物語』の引用は、『日本古典文学大系77　篁物語　平中物語　浜松中納言物語』（岩波書店　昭和三九）による。

(10) 角川文庫『松浦宮物語』補注九及び一二。

(11) 注2河野氏論文。

(12) 角川文庫『松浦宮物語』二六ページ注六及び補注七八、七九、及び注2河野氏論文。

(13) 定家作者説はほぼ定説化しているが、『奥入』が「広陵」の注として『晋書』嵇康伝をひいていることは注目される。『松浦宮物語』に重要な役割を果たしたと考えられる明石巻の注に陶紅英のモデルと目される嵇康の伝が存在するという事象は、『松浦宮物語』構想の源泉を示唆している可能性を秘めていよう。

(14) 注2河野氏論文。なお河野氏は、謎の女に出会う場面と華陽公主物語の検討の際に引用した琴談義直前シーンとの関連を論じておられる。文辞的には華陽公主関連記事の方がより近いと考えられるが、確かに雰囲気には通い合うものがある。

(15) 注2錦氏論文。

(16) 注2錦氏論文。

(17) 鄧皇后の発言は、主人公の運命の事後解明という点で、構造的にも作品前半の〈予言〉とは明らかに異質である。

(18) 以上に述べてきた以外にも、例えば、この物語の特徴として、月という要素がこれまで指摘されているが、そのことも須磨、明石巻摂取の証左となろう。また、弁少将は住吉明神の加護を受けているが、須磨、明石巻における住吉明神の重要性はいうまでもない。

(19) 注6論文。

(20) 注2錦氏論文。

(21) 『日本古典文学大辞典』第二巻（岩波書店　昭和五九）「貴種流離譚」項（秋山虔氏執筆）による。

(22) 主人公の流離は現世での問題にとどまらず、天界から人間界へという構図も裏に秘めており、『松浦宮物語』は多重に織り成された〈貴種流離譚〉とみなすことができる。

（あべ・まゆみ　本学大学院博士後期課程）